

# 漢字の神話

## 第一章

はじめに

人は、言葉で物事を考えます。だから、理解する言葉の数が多ければ多いほど、その人の思考の幅は広く、理解する言葉の深さが深いほど、思考の精密度が高い訳です。近ごろ、アメリカで、人間工学研究所の大々的な調査により、「言葉を正確に、豊かに使う人が、あらゆる方面で成功している」ということが実証されましたが、それは当然のことだと言わなければなりません。

日本でも、最近、「漢字に強い生徒は、どんな学科にも強い」ことが、多くの学校の調査で明らかにされてきています。世界的な数学者として有名な岡潔先生は、「子供たちの使う漢字を制限すると、思考力の発達が妨げられる。今のような教育が今後も引き続いて行われたら、日本の文化は滅びてしまう」と警告されています。



明治以来、漢字は原始的な文字で、これを棄て、表音文字に改めない限り、西欧の文化に追いつき、追い越すことはできない、という考え方が、根強くなっていました。ところが、最近になって、表音文字よりも表意文字の方が機能的に優れていることがわかり、欧米諸国では、何らかの形で漢字を取り入れる研究まで進められているようです。

ともあれ、人間の思考の土台になる概念を直接に表現している漢字を、一つでも数多く正確に理解することが、あらゆる学問、またあらゆる仕事を進めていくのに、最も必要な最も基本的なことであることは、まちがいありません。

本書は、若い人々に、現在最も欠けていると言われる正確な漢字の知識を補うべく、合理的な新しい漢字の学び方、考え方を提示するものです。漢字の学び方は、推理小説の謎を解くようであればいけません。クイズを解くようなつもりで、読んでいただきたいと思えます。

## 復活する漢字

漢字は、古代に創作された文字で、現在に引き続いて生きている、世界でただ一つの文字です。今までは、古い故にそれが時代遅れのように考えられていましたが、今は、文字の本質からみて、文字の機能を最もよく備えた文字であることが再認識され始めたのです。なぜなら、文字は、時間的にも空間的にも極度に制限されるという言葉の欠陥を補うべく生まれたもので、音声の届かない範囲にまで、しかも、いつまでも保存のきく言葉として働くところに、価値を持つものです。

とすれば、漢字ほどその機能を大きく効果的に發揮している文字は、他に全く見ることができません。「日・月・山・川」……これらの文字は、それが生まれた中国という地域を超えて、また五千年という驚くほど長い年代をも超えて、その文字の持つ「思想」をそ

のまま今に伝えていきます。

こんな文字が、他のどこにあるでしょう。漢字が、今、欧米諸国の間で見直されようとしているのは当然のことと言わなければなりません。先ごろ、名神高速道路で、標識認知のための実験が行なわれた時、ローマ字標識は認知するのに、仮名の十倍もの時間がかかったのに対して、漢字は、逆に仮名の十分の一の時間で認知できることが確かめられました。それは、漢字が伝えようとする思想そのものを直接に表わす文字だからです。文字とは、元来そういうものであり、またそういうものでなければ、今後の世の中では十分な効果を発揮することはできなくなるでしょう。

わが国では、今まで、表音化が国語政策の目標でした。ところが、欧米では、逆に表音文字の表意化が、今、真剣に考えられているのです。\$・£・&・Co・No……これらは漢字の効果をねらった表意文字であり、欧米では今、益々増加の一途をたどっているの

です(このような略号符号は現在でも二、三千ほどは用いられています)。

これは一体どう考えたらよいのでしょうか。

### 漢字は表意文字ではない

#### —表語文字である

漢字は従来、表意文字という名で呼ばれてきています。しかし、表意文字は表音文字に対立する名称です。ところが、漢字は、最初から、発音と意味とこの両者を表わしている文字なのです。だから、漢字を表意文字と呼ぶのは、少なくとも正しい呼び方ということできません。そう呼んでいたからこそ、今まで、漢字は『非表音文字』であると人々に誤った解釈をさせてしまったのです。しかし、これは事実に戻しています。

私は、漢字を、表語文字 と呼ぶことを提唱します。音声と意味を持つ ことば を表わすのが、文字の本来の使命であり、その ことばを表わす という名の 表語文字こそ、漢字に最もふさわしい名称だと思っからず。

表語文字という名称ならば、表音、表意を兼ね備えていることが、明らかに察知できることでしょう。しかも、それが表意文字、表音文字の上に立つ、最も理想的な文字であることをもよく示すことでしょう。

漢字がこういう文字であるからこそ、欧米でも再認識され、これを取り入れることに真剣になっているのです。

昨年来日された、アメリカ力最高の言語学者と言われるノアム・チョムスキー氏が、表音的な表記法 を、

「それは、意味を理解しようがしまいが、聞いたことをただ再生するためにできていると

言えるでしょう」(朝日ジャーナル 8 No. 40より)

と言ってこれを否定し、

「日本語の事情についてはよく知りませんが」

と断って、

「漢字仮名まじりの文字体系は、世界で最も良い表記法かも知れないと思います」

と言っていることは、文字に対する評価が今変わりつつあることを表わしていると思います。

## 代用品だったローマ字

ローマ字は、今までは世界の文字の中で、最もすぐれた文字であると考えられていました。ところが、表音文字は、文字の生命である最も大切な 思想 を直接に表わすことの

できない文字であり、機能上決してすぐれた文字ではないことが、次第に多くの人々に指摘されるようになってきました。

ローマ字が、そのもとは象形文字であったことは確かです。しかし、それが今のように入音文字になったのを、文字の発展と見たのは間違っていたのです。それは大変軽率でした。

なぜなら、文字を持たない民族が、文字を持つ先進国の文字を取り入れる時、表音文字という形でしか取り入れることができないからなのです。これは明瞭な歴史的事実です。

Aは「アレフ」という「牛」の意味の象形文字でした。Aを遂にしてVにしてみれば、牛の頭を象ったことがよくわかるでしょう。このAを、自国語を表わす文字として借り入れるには、牛という意味を棄てて、ただ「ア」という音を表わす文字としなければなりません。ちょうど、わが国で、「波」の「なみ」という意味を棄てて、ただ「は」という音を表わす文字として漢字を取り入れたのと同じことです。

つまり、文字の表意性を棄てない限り、外国の文字を借用して、自国語を表現することはできないのです。表音性に頼ることだけが、他国の文字を借り入れる場合に許された、ただ一つの方法だったのです。

だから、表音文字は、文字の発展として出現したものではなくて、文字の機能上、不便であるのを承知で、止むを得ない便法として誕生したものなのです。表音文字はすぐれた文字だというのは、とんでもない曲解と言わなければなりません。

### 進歩のなかった漢字学習法

漢字は長い間「前時代的」な文字として、不当な汚名を着せられてきました。そのため、

教育の面でも、いずれは廃止されるべきものとして、その教育指導法は全くだれからも顧みられず、十年一日いや百年一日の如く、ただ旧式な機械的な詰め込み教育しか行なわれませんでした。明治以降、どの教科の学習方法も日進月歩の発展があったのに、漢字の学習方法だけは進歩はおろか、退歩しているとさえ思われる有様です。

ところが、漢字はよく考察してみますと、全体として縦に横に相互に密接な関連があつて、その一つをつまみ上げると、全体がそれに従つて、つぎつぎとひとりづつにつまみ上げられるような関係にあるのです。このような関係にある漢字を、ばらばらに切り離して一つ一つ学習していったのでは、時間がかかり、骨が折れるばかりではなく、折角苦勞して覚えても、すぐ忘れてしまいます。

英語では、早くから、体系的に学ぶ方法が能率的であることを、実験によって確かめております。私は、漢字を体系的に学習する方法について、二十年来研究し、実際の指導にもこれを実践して、その効果を調査してきました。その結果、小学校の一、二年生でも、今の中学生くらい漢字力を身につけさせることは、特別の努力をしなくてもできることがわかりました。

体系的な漢字学習の大きな特長は、基本的な一字の学習で、それに数倍する漢字を類推して知ることができることです。つまり、一字を習えば、十字が自然とわかる、ということとです。また、良いことには、それは、大変に良い「頭脳の体操」になるということですが、それは興味ある楽しい体操なのです。一石二鳥どころか、三鳥、四鳥ということができます。

では、漢字の体系的な学習法とは、どういうことでしょうか。

## 漢字の体系的学習とは

漢字の大部分は、部首と呼ばれる部品の組み合わせによってできています。たとえば、当用漢字は全部で一八五〇字ありますが、それに使われている部首は全部合わせても一九二個しかありません。つまり、一九二個の部品が、いろいろに組み合わせられて、一八五〇字の漢字になっているのです。

だから、一九二個の部品の持つ意味や性格を、その本質からよく理解していくならば、一八五〇字の当用漢字はもちろん、それに数倍する量の漢字の意味、読み方まで大よそ推察することができるのです。

たとえば、**整** という漢字について考えてみることにします。この字は、**束**・**攴**・**攴**の三つの部品によって組み立てられていますが、さらに**束**は木と口(輪の形)、

**攴**は又(手)とノ(棒またはむち)、**正**は止(足の形で、とどまる意味)と一(線)と、それぞれ二つの部品によってできています。

**束**は、木に輪をかけて**たば**ねたことを表わしています。**攴**は、手に棒を持って**たたく**ことを表わしています。**正**は、止まるべき線に止まっていること、つまり**ただしい**ことを表わしています。ですから、**整**という字は、「木を束ねて、不ぞろいになった所を棒でたたいて、きちんと正しくする」ということを表わしていることが、その部首によって正しく汲み取れるのです。しかも、この字の発音は、**正**であることまで、わかるのです。

漢字は、字形が複雑で、機械的にただがむしゃらに覚えようとしたら、確かにむずかしいものと言わなければなりません。しかし、その部品を一つ一つ理解して、これを論理的に学習するなら、これほどやさしく、楽しく覚えられて、しかも忘れようとしても忘れら

れない文字は他にありません。

整という漢字を、試みに和英辞典により翻訳してみますと、

to put (things) in order

に当たることがわかります。to put は ト フ という意味に当たります。

東 は、英語の things に当たります。order は全く正と同じ意味です。

漢字は、ローマ字のアルファベットに当たるものと考えるから、複雑であり、むずかしいと誤解されているのです。漢字は、少なくとも英語の word に当たるものであり、時には「整」のように、数個の単語の集合体にさえ当たるものがあるのです。

このように、漢字を、その本質から考えていきますと、むずかしいどころか、世界一やさしく、機能的にもこれほどすぐれている文字は他にないことが、よくわかりいただけだと思います。また、漢字の学び方も、その本質に根ざした「科学的」「論理的」な学習法でなければならぬことも、ほぼわかりただけだと思います。

## 漢字の構造

、漢字の構成法には、四つの種類があります。その第一は、象形です。象形とは、形を象るといかたどう意味の語で、形のある物について、それをスケッチ風に描いた、言わば絵文字といかたどうべきものです。従って、これに所属する文字は、字形をよく観察すれば、大よその見当のつくものが多くあります。

第二は、指事です。指事とは、形のない、抽象的な事からについて、その事を符号的に指し示す、という意味の語で、「上」「下」というような字がこれです。

形のある物は象形で、形のないものは指事で、すべての言葉はこの二つの方法で表わせるはずですが、単純な内容のものは表わすことができても、内容の複雑なもの、また表わしにくい言葉もあります。そこで、この象形、指事を基にして、それらを

組み合わせることにより、複雑な内容を表わすことを考え出しました。これが、**会意**と**形声**という方法です。

**会意**とは、「意味を会わせる」という意味のことばで、人と木を組み合わせ、**人**が木のかげでやすむ という考え方で「休」という字を作ったのがこの例です。

しかし、象形、指事、会意によって作られた漢字は、漢字全体から見ると、ほんの一部に過ぎません。漢字の大部分、およそ九〇パーセントまでは**形声**字なのです。

**形声**とは、「形かたちと声こえとの両面を備えた文字」という意味のことばです。形とは、象形の形で、**言葉の内容**、**物事の実体**を指しています。声とは、ことばの発音のことばです。つまり、ことばの**意味**と**発音**とを兼ね備えた文字、という意味であって、形声文字をよく観察すれば、その文字の持つ意味も発音も知ることができるのです。